随　筆

中国における日本語教育の一端

慶松　勝太郎

筆者はほぼ 70 歳で東京経済大学の大学院経営学研究科に入学し、2001 年から 2007 年の博士課程修了まで在籍した。大学院に入って驚いたのは留学生の多いことである。中でも中国人が多い。ある年の経営学研究科の入学者数は中国人 10 人、韓国人２人、日本人１人という具合である。もっとも他の大学院に聞いてみると、同じような傾向であるらしい。はじめは解らなかったが中国人留学生と親しくなってみると、朝鮮族の中国人が多い。その理由は彼らに聞いてみて納得した。中国には朝鮮族自治区があるが、朝鮮族系の学校では、我々が、英語を第一外国語として中学から学ぶように、中学高校で日本語を勉強するという。その反面英語はほとんど勉強していない。従って朝鮮族には日本語は上手だが英語は不得意と言う人が多い。朝鮮語の文法は、日本語とほとんど同じと言ってよく、日本語の単語を覚えれば、日本語の習得は比較的やさしいらしい。朝鮮族系の中国人に日本語を学習させることは中国が国家政策として実施しているのであろうが、なかなか考えたものだと思う。

翻って我が国で政府が一部の公立中学で、中国語を第一外国語として強制的に学習させるとしたら猛反対が起きて実施は困難であろう。朝鮮族の人は、生得の言葉は朝鮮語であるが、大学へ進学するには中国語が必要で、なかなか大変である。日本へ留学した人たちは、バイリンガルどころか中国語、朝鮮語、日本語のトライリンガルになる。

中国人留学生は、母国で日本語を勉強したうえ、１年程度の日本語学校での勉強ののち大学院に入学してくるのが普通である。従って、日本語はかなり上手な人が多い。しかし文章を書くとなると話は別である。特に修士論文を書くのは大変である。東京経済大学大学院の経営学研究科は修士論文の提出を修士号取得の条件にしている。留学生の日本語での修士論文作成を助けるため、大学院は大学院ティーチング・アシスタントと言う制度を作った。筆者はこの大学院Ｔ・Ａになり今まで 11 人の修士論文の面倒を見た。もちろん、なかなか優れた中身の論文を書く人もいれば、そうでない人もいる。日本語だけに限ってみると、一般的に言って留学生の一番苦労するのは助詞である。「谷川のそばに学校がありました。」「学校は谷川のそばにありました。」我々が何気なしに使っている助詞は、彼らにとっては極めて厄介な問題である。もうだいぶ前の話になるが、私の友人はアメリカ人の女の子からどうして「そうは言わない」と言

うのか「そうを言わない」ではないかと質問されたそうである。朝鮮語には助詞があって、朝鮮族の人は、比較的日本語の助詞になじみやすいようであるが、漢族の人にとっては助詞のマスターはほとんど不可能のようである。中国語（漢語）には助詞がない。“我愛汝”は“I love you”とまったく同じであって前置詞はあっても「私は」や「あなたを」は存在しない。

もう一つ留学生が苦労するものがある。それは教授が講義中に混ぜる英語である。留学生を相手にアンケート調査をしたことがある。その中で、講義で一番わかりにくいことに挙げられたのが日本語の中で使われる外来語であった。前述したように、朝鮮族の人たちは、そもそも英語をやっていないので苦労するのは当然であるが、漢族系で英語の上手な人たちでも日本語風の外来語、ほとんどの場合日本式英語に苦労するようである。

さて、筆者が修士論文の面倒を見た李雪琴さん（女性）は現在天津外国語学院の分校で日本語科の科長をしている。2009 年 3 月 5 日から 11 日まで北京、天津を訪問する機会を得て、彼女に面会し、彼女の学校も訪問してきた。北京の空港にはもう一人の修士論文の学生　向（シャン）さんが迎えてくれた。彼女は東京経済大学の修士課程を修了してから現在東大の博士課程に在学中である。滞在中誰かが必ずアテンドしてくれると言うフルアテンドであったから、楽なものである。

李さんは夫と子供を中国に残して単身留学であったから、必死であり、よく勉強し、物流に関する良い論文を書いている。彼女としては物流に関して教えたかったようであるが、志と少し違って今は日本語を教えている。ちなみに、彼女も御主人も朝鮮族である。

天津外国語学院（分校）では学長に会って話を聞き、日本語科の先生たちと食事を共にし、6 時半から 1 時間半ほど講演をしてきた。

天津外国語学院は天津市内にある本校が公立で（天津市立）、郊外の開拓区にある分校が私立である。ただし中国では私立とは呼ばないで独立学院または三本と呼ぶそうである。三本は三流本科の略で大学の格付けを表すとのこと。北京大学や南開大学は一本、天津外語学院（本校）は二本だそうである。一流とか二流とかはっきり格付けするのに少々驚く。南開大学は天津で一番良い大学だそうである。天津に周恩来と奥さんの鄧穎超（とうえいちょう）の記念館があるが、これは周恩来が南開大学の出身であるからとのこと。『周恩来秘録』（高文謙著、上村幸治訳、文芸春秋、2007 年）を読むと周恩来が如何に暴君の毛沢東に忠実に仕え、その機嫌をとりつつ、政治を正道に引き戻そうとしたかの歴史が延々と語られているが、周恩来記念館に行くと奥さんの鄧穎超も共産党の大物として影響を及ぼしたことがよくわかる。周恩来と鄧穎超は最後まで相思相愛であったようである。意外なことを発見した。周恩来は最後まで細身でハンサムだが、毛沢東も若いころの写真は、痩せていてなかなかハンサムである。

天津外語学院は、本校は市立なので授業料は安く、年間 5000 元（日本円 75,000 円）位、これに対し私立の分校は言語学の場合年間 15,000 元（日本円 225,000 円）であるが、本校は二本なので学生の質は高く大学入試の成績が分校に比べ 100 点くらい高いということである。具体的には本校で 750 点満点中 500 点以上、分校で 400 点から 430 点必要である。地方からの受験者は、これより上の成績が必要であるが、のちに述べる。本校の外国語学部は英語、フランス語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、韓国語、スワヒリ語

に日本語で 11 ヶ国語、分校は英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、韓国語に日本語で６ヶ国語を教えている。外国語のほかに経済学、法学、メディア学部がある。本校の学生数は約 10,000 人、分校は約 4,000 人である。日本語学部は本校が 1,200 人、分校が 500 人ほどであるが、分校では９月からもう一クラス増やすとのことである。教員の給与は分校のほうがわずか高いが、一方年金保険に加入しなければならない。公立の場合は教員も、事務員も年金は国家が見てくれるので、保険加入は必要ない。ただし見直しが行われており国家公務員も年金保険支払いに移行しているところもあるとか。分校の初任給は手取り 2,000 元（日本円 30,000 円）と安い。一年経つと 2,500 元に昇給する。そのほかにローンで家を買うと住宅補助金が出る。

日本と違うところは学校に共産党の書記が常駐していることで、学長室の隣に書記室がある。共産党書記の権限は微妙な問題だが、一応学校の経営全体に発言権があるらしい。但し教学については、学長に発言権がある。本校の学長は力が強く、人事権を握っている。分校（私立）の代表取締役は本校の学長で分校の書記は本校の学長が任命した。分校で書類にサインをするのは書記で、人事権も書記にある。ただしその辺の権力の配分は微妙で李さんたちも誰に最初に報告するかは迷うことがあるそうである。

分校の学長王さんは 60 過ぎの温厚な紳士でフランス語が専門である。中国で最初にフランスに留学した一人らしいが、筆者の怪しげなフランス語の聞き取り故、保障しかねる。

学長に分校の学生の質について質問したところ面白い話を聞いた。中国では、出身地別に学生の割当制度があり、天津外語学院は天津にあるため、天津居住者が多く割り当てを受ける。それに対し地方出身者は割り当てが少ないので、競争が激しく良い成績でないと入学できない。したがって天津出身者は平均的にはあまり質が高いとは言えず、地方出身者の質が高い。本校の場合入試成績が、500 点以上必要であるが地方出身者は 550 点以上、分校の場合は 400-430 点のところ 500 点以上が必要である。つまり分校の場合地方出身者は本校入学並みの入学試験成績を要する。したがって戸籍を都市に移したい人は多いが、これが容易ではない。戸籍を移すには二つ方法があって、一つは勤め先の会社に、高級人材（修士卒以上）として申請するか、都市に家を買うかである。家を買うにしても 80 万元以上（日本円 1,200 万円）ローンではだめで即金払いである。戸籍移動が制限されているところは、さすが社会主義国家である。

一緒に食事をした中国人の日本語教師の人たち７人ほどは、皆私と話をするのに不自由ではないが、完ぺきとは言えない。中で特に日本語が流ちょうな女性は拓殖大学に留学したことがあり、LEC 会計大学院の土屋先生の奥様を存じ上げているとのことであった。土屋先生の奥様は拓殖大学で留学生の面倒を見て居られる。

講演には 180 人ほど入る教室が使われたが、ほとんど万席であった。一二年生は出なくても良いといわれていたが、結構いたらしい。分校は、開拓区にあり市内までは車で一時間くらいかかり、学生は学生寮住まいであるから、退屈しのぎに日本人の顔を見にきたのもあるかもしれない。ただし雰囲気は非常に友好的であった。演題は李さんの希望もあり「日本経済の現状と世界のこれからの問題」とした。バブル崩壊から、現在の不景気までの日本経済の話をざっとして、そのあとでこれからの世界の問題として、

１．　地球の過剰人口
２．　世界の人口の高齢化
３．　石油のピークアウト

４．　地球温暖化を含む環境問題

の四つを挙げ、それぞれについて解説した。人口の高齢化については、中国は一人っ子政策のため、ある時点から高齢化が急速に進むこと、資源問題では中国の発展は世界経済には好ましいが、資源消費特に石油消費の拡大と言う問題を抱えていること、地球温暖化も問題であるが、中国は日本が昭和 40 年代に経験した環境汚染に直面していることを話した。

しかし、残念ながら大体を理解した人はあまりいなかったらしい。大体わかった人と言う質問に手を挙げた人は多くなかった。挙手したひとりに学生が大笑いをしたが、その人は学生に日本語の会話を教えている日本人だとのことであった。講演は日本語と英語でと言うことだったので大部分は日本語で行ったが、結論だけは英語でもう一度述べた。

今回の講演で反省したことが一つある。それは、スライドなり、パワーポイントなりを使って、各項目のタイトルや数字を示せば良かったということで、言葉だけでなく目にも訴えたほうが理解はしやすかったであろうが、後知恵であった。

翌日、李さんは用事があり、前述の周恩来記念館に案内してくれたのは分校 3 年の高君と分校在学中だが、交換留学生で富士常葉大学に留学中の女性（お名前は失念）であった。この高君は、前日の私の講演はほとんど解らなかったという。彼のいうところでは友人たちもほとんど解らなかったとのことである。

ここで、天津出身者と地方出身者の質の違いの実例を真近に見ることになった。留学中の女性はかなり日本語が上手で私との会話もほとんど不自由しないのに比べ、高君のほうは 3 年生と言いながら、簡単な日本語すら解らず、しゃべることもほとんどできない。高君が天津市出身なのに対し、女性のほうは四川省出身である。李さんに聞くと高君の入試の時の成績が 300 点台（入学に必要な点数は年により変わる）なのに対し女性のほうは 500 点台だったとのことである。

現在の世界大不況の影響で天津外語学院卒業生の今年の就職は大変厳しいという。しかし、日本語科の卒業生の就職率は比較的良いほうで、日本語科は人気が高い。

中国に反日感情が残っていないということはないが、今回の訪問では少なくとも、天津外語学院に関する限り極めて友好的な雰囲気であった。日本語を選択した人たちは、就職に有利と言った現実的判断があるのは当然とだが、日本に好意的感情を持っている人も多いと推測される。なにしろ本校分校合わせて 1,700 人もの学生が日本語を勉強していることは嬉しい。日本語が上手になって、日本が好きになり中国と日本との架け橋になってくれる人が多くなることは我が国にとっても極めて好ましいことであろう。

出来れば来年も訪問し、もう少し解りやすい講演をしたいと思っている。中国へ来て日本語の先生をやらないかと言う勧誘も受けたが、LEC の仕事を続ける限り長期滞在は不可能である。しかし、春休みなら、1 週間や 10 日の滞在は可能なので日本語の先生たちに集中講義をするのはどうかと李さんに提案してきた。ちなみに中国では 9 月始業であるが、冬休みは春節（2 月 4 日頃）までで、3 月には普通に授業が行われている。訪問を実現し、少しでも中国の日本語教育の発展に寄与できればと思っている。

文中の細かい数字や、詳しい状況は後から李さんにメールで質問し補足してもらった。